大津
歴博だより
1997
No.31
OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

"THE NEW YORK AND NEW JERSEY UKIYO-E COLLECTION"

-THE BROOKLYN MUSEUM OF ART-THE METROPOLITAN MUSEUM OF ART-THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY/THE NEWARK MUSEUM-

ニューヨーク
ニュージャージー
ブルックリン美術館・メトロポリタン美術館・ニューヨーク公立図書館／ニューアーク美術館――

浮世絵コレクション展

11月1日[土]→12月7日[日]
'97

無款（鈴木春信）『耳そばだてて』　中判（絵暦）　ニューヨーク公立図書館蔵

©Print Collection, Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Print and Photographs, The New York Public Library, Astor, Lenox and Tilden Foundations

浮世絵の美術作品としての価値は、日本よりヨーロッパやアメリカで早くから認められ、多くの優品が海外に流出し、世界各地で多くのコレクションが形成されています。近年、そのコレクションの多くが里帰り展と銘打って日本で公開されています。

しかし、ヨーロッパの浮世絵コレクションに比べ、アメリカにある浮世絵作品はなかなか目に触れる機会がありませんでした。本展は、これまでまだ取り上げられたことがないアメリカのコレクションのなかで、アメリカ経済の中心地ーニューヨーク・メトロポリタン・エリア（ニューヨーク市と周辺二二郡からなる経済地域）の充実したコレクションに焦点をしぼりって紹介するもので、ニューヨーク州のブルックリン美術館・ニューヨーク公立図書館・メトロポリタン美術館、ニュージャージー州のニューアーク美術館の四館が、世界に誇る代表的な作品のなかから約一二〇点を展示します。

北斎、広重、豊国、歌麿、春信など、著名な絵師の風景画や役者絵・美人画をはじめ、『桜狩遊楽図屏風』など、ほとんどが日本初公開です。また、特別出品として、ニューヨーク・グローリエ・クラブから、新発見の歌川国芳の肉筆画の大作『中国武人図』も展示されます。

アメリカのコレクターが熱心に収集し、大切に保存したきたコレクションの豊富な内容と、鮮やかな浮世絵の美を堪能していただければと、考えています。

特別展の内容

本展は、ニューヨーク州のブルックリン美術館・ニューヨーク公立図書館・メトロポリタン美術館、そしてニュージャージ州のニューアーク美術館、あわせて四館の所蔵作品を展示するため、展示構成は、ブルックリン美術館、ニューヨーク公立図書館、メトロポリタン美術館、ニューアーク美術館の順で、各館ごとに作品を陳列します。

☆主な展示作品

無款（鈴木春信）『耳そばだてて』　中判（絵暦）　ニューヨーク公立図書館蔵

昭和三年（一七六六）の絵暦で、美人の帯には大の月「正、三、五、六、八、九、十一」と白抜きの文字が読み取れる。夜の雨音に耳をそばだてているのだろうか、夜着を身に着けた女性の姿を描いた作品で、春信には、『座舗八景　台子の夜雨』など、音を描いた作品がいくつかある。（表紙写真）

歌川国芳『中国武人図』　紙本淡彩　一面　縦八二・五㌢×横一六六・四㌢　グローリエ・クラブ蔵

「武者絵の国芳」といわれているにもかかわらず、国芳の肉筆による武者絵は現存数が極めて少ない。本作品は、日英博覧会（明治四三年）の日本代表を務め建築家フランク・ロイド・ライトの浮世絵収集における相談役でもあった執行弘道により、アメリカのグローリエ・クラブへ寄贈されたもので、記念すべき里帰りである。

描かれている人物は水滸伝中の豪傑「九紋龍史進」と思われ、筆跡からみて、彼が水滸伝でデビューした頃の制作であろうといわれている。

喜多川歌麿『風流六哥撰　扇屋内花扇』　大判　ニューヨーク公立図書館蔵

本作品は、歌麿の代表作の一つ『高名美人六家撰』の改題改訂版。『高名美人六家撰』は、こま絵に判じ絵で人物名を表しているが、本シリーズでは、これが六歌仙の人物に代えられている。寛政五年（一七九三）の町触で、画中に遊女以外の女性の名前を書くことが禁止されたため、判じ絵により名を示したものが、同八年に判じ絵も禁止されたことから、さらに改められたもの。本作品の花扇だけが遊女であったため画面に名前が入っている。

喜多川歌麿「風流六哥撰　扇屋内花扇」
©Charles Stewart Smith Collection Print Collection, Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Print and Photographs, The New York Public Library, Astor, Lenox and Tilden Foundations

歌川国芳「中国武人図」
©The Grolier Club

無款『桜狩遊楽図屏風』　四曲一隻
縦八五・〇㌢×横二一九・七㌢
ブルックリン美術館蔵

本作品は、四曲一双の右隻にあたり、寛永期（一六二四～四四）を代表する風俗画として知られている。一双の屏風が、何時離ればなれになったかは不明であるが、左隻はかつて岸田劉生が所属していたことが日記などにより知られている（現在は東京の個人蔵となっている）。「かぶき者」と称された男女の花見に浮かれる様を、人物を中心に描いており、風俗資料としても評価の高い作品である。

無款「桜狩遊楽図屏風」
©Brooklyn Museum of Art, Gift of Mr. Frederic B. Pratt

葛飾北斎『冨嶽三十六景　凱風快晴』　大判
ニューアーク美術館蔵

『冨嶽三十六景』は、天保初年（一八三一）頃、北斎七〇歳代の始めに出版された彼の代表作の一つ。北斎らしい工夫をこらした構図の数々に富士山の様々な表現が描かれており、広重の『東海道五拾三次』（横判）とともに、浮世絵の風景版画を代表する作品として評価が高い。

なかでも「凱風快晴」は、爽やかな風が吹きわたる快晴の一日の富士を描いた作品で、全四六枚のシリーズのなかで最もよく知られ、〝赤富士〟の通称で親しまれている。本展では、「凱風快晴」をはじめ五点が出品される。

広重『名所江戸百景　真乳山山谷堀夜景』　大判
ブルックリン美術館蔵

名所江戸百景は、広重作一一八枚、二代広重作一枚に、目録一枚を加えた大シリーズで、『東海道五拾三次』『木曽海道六拾九次』『近江八景』などとともに、広重の代表作の一つ。本展では『真乳山山谷堀夜景』をはじめ六点が出品される。

期間中の休館日
11月4日・10日・17日・25日
12月1日

葛飾北斎「冨嶽三十六景　凱風快晴」
©Collection of The Newark Museum, 1951, Louis V. Ledoux Collection Wallace M. Scudder Bequest Fund

歌川広重「名所江戸百景　真乳山山谷堀夜景」
©Brooklyn Museum of Art Collection

学芸員のノートから⑧

●元禄八年大津枡屋町絵図について

本年一月から二月にかけて特別陳列「絵図に見る大津百町」を開催した。市民にとって身近なテーマであったため、多くの観覧者を迎えることができ、展覧会場に設置した感想ノートにもたくさんの興味深い思い出話を書いていただくことができた。また、この絵図展に前後して、絵図資料も数多く調査することができたが、今回はそのなかから元禄八年（一六九五）作成の枡屋町絵図について紹介したい。

浜大津からJR大津駅にかけての市街地と国道一号線沿い（中央・長等・逢坂・藤尾各学区）には、江戸時代、百カ町もの小さな町がひしめきあっていた。今からざっと三〇〇年前の元禄八年、当時の大津代官小野半之助宗清が、それら百カ町に対し、町内の居住者や各戸の敷地割り、番屋、石橋、用水、木戸門などの各施設を、一枚の図面に詳細に認めて提出するように命じた。そのようにして作成された元禄八年の各町絵図が、現在百カ町のうち七八カ町分残されている。所蔵先別に見ると、滋賀県立図書館に五四カ町（県指定文化財）、大津市歴史博物館に三〇カ町が保管され、そのうち重複分が九カ町、したがって、両館だけで七五カ町分の町絵図があることになる。また地元の自治会にも、この元禄八年絵図は所蔵されているのだが、その多くは両館のものと重複している。しかし、先の特別陳列開催直前に、それとは重複しない元禄八年絵図が、枡屋町で発見されたのである。

●近江蕉門江左尚白の屋敷地について

枡屋町は、市立図書館（浜大津二丁目）付近に位置する町で、絵図は縦一〇三・八㎝、横一六七・七㎝。厚手の和紙を継ぎ合わせたものに線引きされている。新たな絵図の発見そのものが貴重なことは言うまでもないが、特に目を引くことが二点ある。最初の一点は絵図中に今まで所在が確定していなかった松尾芭蕉の門人江左尚白の屋敷地が記されていたことである。従来から、尚白邸は枡屋町との大方の合意はあったのだが、なかには柳屋町とか柴屋町といった記述もあり、また枡屋町でも現在のヤサカタクシーあたり（市立図書館西隣）といった説もあり決して一定ではなかったのである。絵図が作成された元禄八年は、その前年に芭蕉が没していることから、芭蕉と同時期の資料であり、充分に信頼すべきものといえるだろう。

尚白の屋敷地は枡屋町の東南隅で、敷地割りのなかに「三益」の墨書がある。三益とは、尚白の別号であり、また絵図の裏面には各居住者の署名があるが、それには「三益」の署名の下に「尚白」と読める円形（重郭（直径二・五㎝）の印鑑が押捺されている。今回尚白の屋敷地が確定したことと合わせて、絵図裏面に押印された尚白の印鑑も初出であり、今後の尚白の作品群の判定にもおおいに約立つと考えられる。

尚白の屋敷地は間口一〇間二尺九寸（約二〇m）奥行き二二間四尺九寸（約四五m）で屋敷奥に西側に出張った逆L字型の敷地であった。敷地はざっと一千一〇〇㎡で、位置は現在の長等三丁目一番二四号から裏手の野村證券にかけてであった。

枡屋町絵図（部分、写真右下が三益の屋敷）

絵図裏書（右から三人目が「三益」）

●鍵屋五兵衛宅について

枡屋町絵図で注目すべきもう一点は、鍵屋五兵衛の宅地が記載されていることである。鍵屋五兵衛とは、本姓中村で、代々五兵衛を名乗っていた。同家は若狭小浜藩の蔵元をはじめ数藩にわたる御用を預かり、大津御用米会所の米方取締役の一人であった。彼は米商と両替商をかねた、いわゆる大津の豪商の一人で、大津の画家である紀楳亭のパトロンであるとともに、俳諧・茶の湯をたしなむ文化人であったのである。

さて、今回の元禄八年枡屋町絵図には、各戸の敷地割りの箇所に記された居住者の名前の上に、何枚もの貼紙が重ねて貼られている。それは、各戸の家屋敷所有者の交代を示すものだが、その貼紙を丹念に見ていくと、「鍵屋五兵衛」「菱屋平兵衛より鍵屋五兵衛へ売り渡す」などの墨書のある貼紙が何枚も見いだされた。つまり大津の豪商鍵屋五兵衛が、元禄八年絵図作成後ほどない、いつかの時点で枡屋町に住みつき、枡屋町内で家屋敷を買得、集積し、勢力を拡大していった様子が、この絵図の貼紙から復元できるのである。

ところで今回の特別陳列期間中、山科区在住の方がお見えになったが、お聞きすると鍵屋五兵衛の子孫に連なる家であるという。さっそく御自宅にお伺いすると、鍵屋五兵衛一族の詳細な家系図を拝見することができた。それによると、鍵屋の初代中村五兵衛茂継が枡屋町に住んだのは、「正徳、享保ノ頃」とあり、絵図の貼紙と一致する。また鍵屋の一族が大津百町の広範な地域に分布居住していた様子が分かり、鍵屋と大津町がいかに密接に結びついていたかが明らかになったのである。

（樋爪　修）

『図説大津市史』だより②

前回、市制一〇〇周年記念事業の一環として『図説大津市史』の編さんがスタートしたことを御紹介しました。その後、大津市史編さん室では会議を重ね、現在市史の目次や執筆者、各項目の図版やページ割りについての最終の詰めを行っています。

それとともに、市内各地で新たに資料調査を実施しており、おかげさまで、市民の方々から貴重な資料の提供や所在に関する情報提供を数多くいただきました。紙面を借りてお礼申し上げる次第です。

資料提供のお願いにつきましては、前回の「歴博だより30号」に、明治以降の建物や風俗、町並み、市内の商店や映画館のポスター・パンフレット等と記しましたが、今回は商店街の宣伝ビラとして明治から昭和にかけて数多く印刷された「引札（ひきふだ）」についてご紹介するとともに、それら資料の情報提供を求めたいと思います。

明治から昭和にかけて、市内の各地、旧大津町や堅田、膳所、石山、瀬田などに、時代を前後して商店街が形成されていきました。堅田では東洋レーヨンの建設が大きな役割を果たしていました。それらの商店街ではB4版からA3版の大きさで、各商店の宣伝とともに、恵比寿・大黒など七福神や富士山、松竹梅、宝船など縁起物や、当時の花形役者、飛行機や鉄道など近代化を象徴し、目を引くものなどが好んで図柄に選ばれたのです。また双六形式を加味したもの、各年代の暦を付けたものなど、商店をより印象付けようと工夫をこらしたものなどがあります。

現在までの資料調査の過程で、瀬田橋本の商店街、京町通りの商店街などの引札は若干ですが収集されています。ただ、旧大津町の市街地では寺町通や中町通の商店街、堅田、石山、膳所などの商店街の引札がまったくといってよいほど集まっておりません。引札は、市内への大型店舗進出以前、商店街で生活必需品を買い揃えていた頃の、商店街のにぎわいぶりを示す恰好の資料といえるでしょう。なお、歴史博物館では『図説大津市史』発刊（平成十一年十月）に先立ち、市制一〇〇周年記念の展覧会を準備中です。この欄で提供をお願いした資料については、それらの展覧会にも積極的に反映していきたいと考えています。御協力をお願いします。

＊連絡先　歴史博物館内市史編さん室
☎〇七七五―二―六一七三（直通）

橋本商店街の引札

れきはくインフォメーション

11月

8 土
第146回土曜講座
浮世絵コレクション展 展示品解説
メトロポリタン美術館をはじめとする日本初公開のコレクションのうち、春信・歌麿・北斎・広重の優品について解説します。
13時30分～15時　講師　横谷賢一郎（本館学芸員）

15 土
記念講演会
浮世絵の魅力
華麗な色彩と自由な表現で内外を問わず高い人気の浮世絵。今回の展覧会で里帰りした作品も含め、その魅力を近世絵画研究の第一人者である講師が解説します。
13時30分～15時　講師　永田　生慈（太田記念美術館副館長）

22 土
第147回土曜講座
近江と浮世絵版画
殊に室町時代後期から京近隣の景勝地として注目された近江は、近世にも様々な絵画作品の画題とされました。そうした作品の中から浮世絵について斯界の権威が概説します。
13時30分～15時　講師　石丸　正運（滋賀県立近代美術館長）

29 土
第148回土曜講座
浮世絵に描かれた近江の街道
諸街道が分岐する大津をはじめ、近世には旅への関心の高まりもあり、近江の風景が浮世絵の題材となりました。そうした作品の数々について近世史の視点から紹介します。
13時30分～15時　講師　八杉　淳（草津市立街道文化情報センター主査）

12月

6 土
第149回土曜講座
大津市内の発掘成果―近江国庁の大倉庫群発見！―
市内発掘成果の最新情報を紹介します。今回は、近江国庁の倉庫と考えられる建物が南北300mにわたり12棟も発見された物山遺跡について報告します。
13時30分～15時　講師　田中　久雄（大津市教育委員会文化財保護課主任）

13 土
第53回親子歴史講座
拓本のとり方
消えかかった瓦の文様や道標の文字などを鮮やかに浮かび上がらせる拓本。それは資料収集の有効な方法です。実際に拓本を採りながらその方法について学びます。
10時30分～12時　講師　山崎　和宏（本館学芸員）

24 土
第150回土曜講座
交通の要所 大津の歴史的変遷
主要な街道が集中し、古代以来、交通の要所としての役割を担ってきた大津。そうした大津の地理的・歴史的特質を視点に、その歴史の変遷を概説します。
13時30分～15時　講師　木村　至宏（本館館長）

1月

＊親子歴史講座は、小学生とその保護者が対象です。
＊いずれの講座もハガキでお申込み下さい。

ニューヨーク ニュージャージー　浮世絵コレクション展
11月1日(土)～12月7日(日)

収蔵品紹介 29

新羅明神像
絹本著色　一幅
縦一五一・九㌢　横七四・六㌢
南北朝時代　当館蔵

新羅明神は、その名のとおり、異国の神です。園城寺（三井寺）中興の祖とされる平安時代初期（九世紀）の僧円珍（智証大師）が、入唐求法（仏教を学ぶため唐時代の中国へ留学すること）の旅を終えて帰国しようとしたとき、船上に現れて円珍の教法の守護を誓ったといいます。以後、園城寺の護法神として、長く崇敬をあつめました。園城寺山内の新羅善神堂には平安時代後期の彫像（国宝）がまつられていますが、これは現存する新羅明神像のなかで最古の作品です。

ここに紹介する画像は、当館の博物館建設準備中に購入した作品で、園城寺の所蔵する重要文化財の作品などと同様、敷物をかけた椅子に右足を踏み下げてすわり、左手に錫杖、右手に巻物をもつ老相の男性の姿に描かれています。裏書によると、破損のため、応永十五年（一四〇八）に大法師盛宗を奉行とし、表装師（表具師）玄覚によって修理されています。画風からは室町時代頃のものかとも思われますが、この修理銘によって、南北朝時代の作と考えることができます。かつては園城寺山内のいずこかに収蔵され、法会に際して懸けられたものでしょう。蓮華文と宝相華唐草文をあしらった描表装（表具の部分を画面と同じ絹地に描く手法）を表していますが、この部分の文様の共通する幾つかの他の作品（天台大師像や智証大師像など）が知られています。

（岩田　茂樹）

大津歴博だより　No.31
平成9年10月1日
大津市歴史博物館
〒520 大津市御陵町2－2　☎（0775）21－2100